

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463572

研究課題名(和文)在宅終末期がん患者を看取る家族のグリーフケアに関する看護師の教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a nurse's educational program on family grief care that takes care of terminal cancer patients at home

研究代表者

岡本 双美子 (Okamoto, Fumiko)

大阪府立大学・看護学研究科・准教授

研究者番号：40342232

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：在宅終末期がん患者を看取る家族へグリーフケアを実施する訪問看護師の困難とは、病状理解への支援の難しさ、家族の気持ちを聞けないジレンマ、死の受容への支援の戸惑い、意思決定支援や家族間の調整への悩み、グリーフケアの理解や知識不足、看護師自身の辛さ、実施方法への戸惑い、ケア評価の難しさ、体制が不十分であることが明らかになった。

そこで、グリーフケア教育プログラムを実施した結果、グリーフケアへの興味や理解度、予期悲嘆・グリーフへのケア実施意欲や訪問看護師の役割であるという認識、必要性の認識、そして、家族が十分介護を行ったことを伝えることや手記や本、遺族会などを紹介することが実施前よりも高くなっていった。

研究成果の概要(英文)：As to the difficult feelings of the visiting nurses regarding grief care for families providing end-of-life care for cancer patients at home, support for understanding of medical condition, cannot listening to the feelings of family, support for the acceptance of death or decision-making and coordination among family members, lack of understanding or knowledge of grief care, how to implement or evaluation of grief care, insufficient system to do grief care and nurse's own grief.

Scores for the following variables significantly differed from before and after the education program: I speak for family's feelings (p=0.050); I tell that it was enough family's care (p=0.001); I introduce books and self-help groups to family (p=0.002).

研究分野：在宅看護学

キーワード：グリーフケア 緩和ケア 家族看護 困難感 教育プログラム 訪問看護 終末期がん患者 看取り

1. 研究開始当初の背景

我が国の医療制度では、訪問看護の対象に遺族は含まれていない。訪問看護の対象は、何らかの疾患を持った、あるいは医師が訪問看護を必要だと判断した患者とその家族であり、患者が生存している間は、訪問看護の中で家族へのケアは重要な位置を占めている。家族へのケアの一つとして、近い将来患者の死が訪れることを予め嘆き悲しむ予期悲嘆へのケアを実施しており(遠山ら, 2010)、予期悲嘆は死別後の家族の悲嘆を緩和する安全装置と言われ(Lindemann, 1944)、家族の複雑(病的)な悲嘆(Burnell, et al, 1994)の回避につながる。しかしながら、患者が亡くなると同時に家族へのケアは打ち切れ、遺族は死別後の辛い時期に継続してケアを受けることができない。

訪問看護ステーションの管理者の8割以上がグリーフケアの必要性を感じており(小野, 2010)、申請者らが行った「在宅ケアにおける遺族支援に関する調査」では、訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師の74%が、患者の死後に遺族訪問(グリーフケア)を行っていた(黒川ら, 2005)。しかしながら、訪問看護師の行っているグリーフケアは医療制度に組み込まれておらず、ボランティアで行われているため、質の高いケアを継続して提供することが難しく、グリーフケアの方法の不明瞭さが課題として挙げられている(小野, 2010)。

現在の日本の死因第1位は悪性新生物であり、2006年の調査(大阪府看護協会, 2006)では、在宅で訪問看護を利用し終末期を迎えている患者の75%ががん患者であった。近年の医療制度の改定により、40歳から65歳未満の末期がん患者も介護保険を利用できるようになり、診療報酬の改正では、24時間対応可能な在宅療養支援診療所が整備され、在宅におけるターミナルケア及び看取りに係る評価において見直しが行われるなど、在宅で終末期がん患者を看取る環境は整いつつあると言え、今後さらに在宅で療養する終末期がん患者とその家族は増加することが予測される。

2. 研究の目的

(1) 在宅で終末期がん患者を看取る家族に焦点をあてたグリーフケアに関する教育プログラムを考案するために、在宅で終末期がん患者を看取る家族へのグリーフケアの訪問看護師の困難感を明らかにする。

(2) 訪問看護師を対象とした在宅で終末期がん患者を看取る家族へのグリーフケアに関する教育プログラムを開発する。

(3) 開発した教育プログラムの実施とその評価を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 半構成的面接法による質的研究。対象は、在宅で終末期がん患者とその家族へのケアを実践した経験のある者のうち、研究協力に同意の得られた訪問看護師15名程度。

分析では、研究協力者のインタビューの逐語録から、グリーフケアに関する困難感について該当する内容を文脈単位ですべて抽出し、抽出したものを意味内容が損なわれないようにコード化する。抽出したコードは、意味内容の類似したものを集めて分類し、その共通性を見出し名称をつけてサブカテゴリー化、カテゴリー化を行い、質的記述的に分析する。

(2) (1)の結果と文献検討により、在宅で終末期がん患者を看取る家族へのグリーフケアに関する教育プログラムを開発する。

(3) 一群事前事後テストデザイン。対象は、近畿圏内の訪問看護ステーションの訪問看護師50名程度。

調査は、無記名自記式質問紙調査法を用い、研修会の開始前と終了直後、開始前と終了後1か月に実施する。

調査内容として、個人の特性は年齢、性別、経験年数、勤務形態、資格、グリーフケアの教育経験である。アンケート内容は、グリーフケアの認識、グリーフケアの興味・理解度、実施意欲、訪問看護師の役割への認識、必要性、困難度、グリーフケアで困っている内容、グリーフケア実践時に大切にしていること、グリーフケア実践の頻度である。

分析方法は、対応のあるt検定を行う。データは、統計解析ソフトSPSS21.0を使用し、有意水準は5%とする。

4. 研究成果

(1) 対象は、13名で全員が女性、平均年齢は 44.5 ± 4.7 (36~51)歳であった。在宅終末期がん患者への看護の経験は 10.8 ± 5.6 (4~20)年であった。認定看護師3名、専門看護師1名であり、全員が緩和ケアの教育・研修の受講経験があった。グリーフケアの教育・研修の受講経験が有7名、なし6名であった。

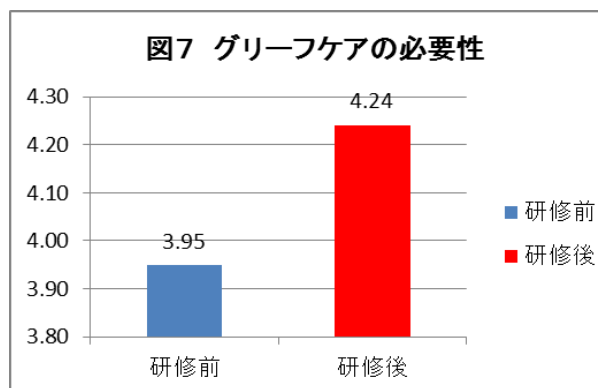
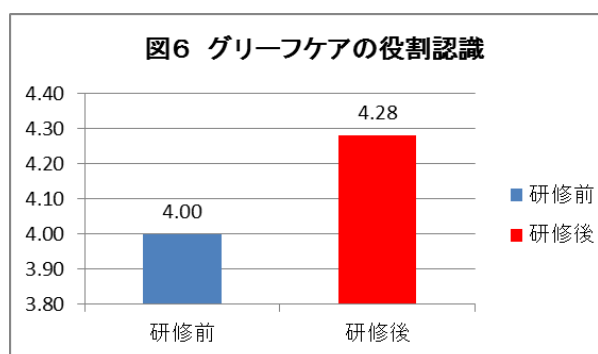
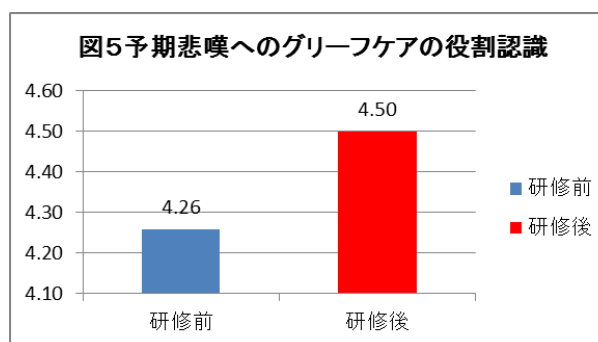
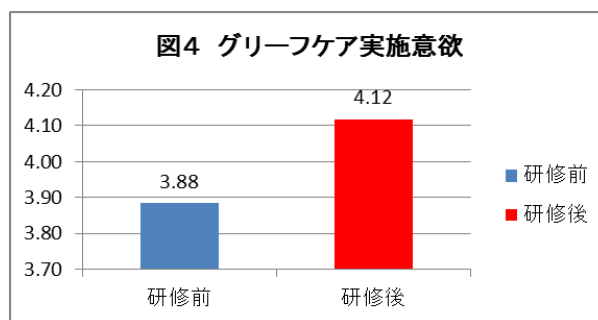
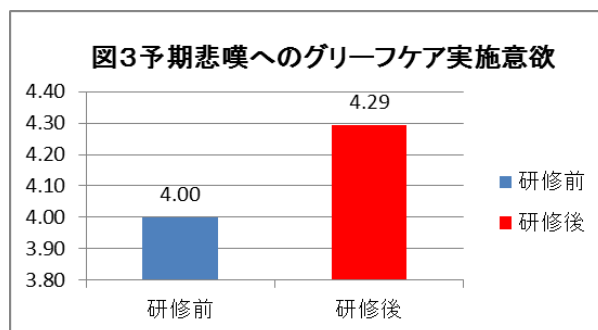
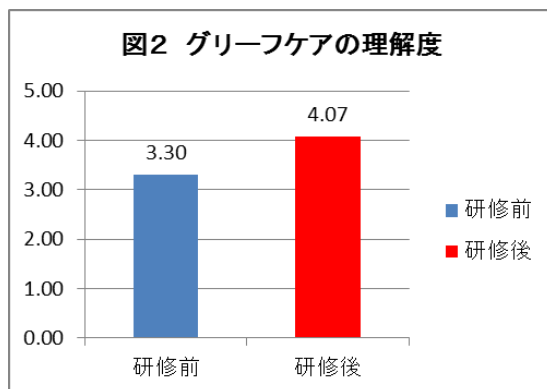
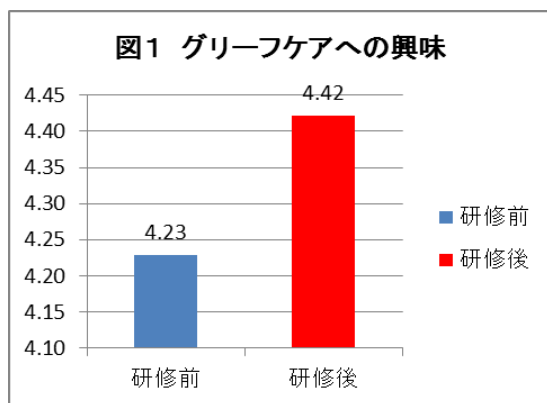
死別前の在宅終末期がん患者を看取る家族へグリーフケアを実施する困難感では、【病状理解への支援の難しさ】と【家族の気持ちを聞けないジレンマ】、【死の受容への支援の戸惑い】、【意思決定支援や家族間の調整への悩み】、【グリーフケアの理解不足】、【看護師自身の辛さ】、死別後では、【グリーフケアの知識不足】と【グリーフケアの理解不足】、【グリーフケアの実施方法への戸惑い】、【グリーフケアの評価の難しさ】、【グリーフケアを行う体制が不十分】、そして【看護師自身の悲嘆】が抽出された。

グリーフケアを実践するためには、教育的・心理的支援が重要であることが示唆された。

(2) 在宅で終末期がん患者を看取る家族に焦点をあてたグリーフケアに関する困難感には、グリーフケアの理解不足や知識不足、グリーフケアの実施方法への戸惑い、グリーフケアの評価の難しさ、そして、看護師自身の悲嘆があった。これらの結果から、訪問看護師を対象とした在宅で終末期がん患者を看取る家族へのグリーフケアに関する教育プログラムを開発した。

主な内容は、グリーフ(悲嘆)と予期悲嘆、複雑な悲嘆、グリーフケアの発展、グリーフケアの実際、ケア提供者へのグリーフケアなどであった。

(3) 対象は、60名で全員が女性であった。訪問看護経験年数の平均は 6.8 ± 5.6 、看護師経験の平均は 20.4 ± 7.5 年であった。研修会前と終了直後において、有意な差がみられた項目は、グリーフケアへの興味 ($p=0.007$)、グリーフケアの理解度 ($p=0.000$)、グリーフケアへの実施意欲 ($p=0.000$)、予期悲嘆へのグリーフケア実施意欲 ($p=0.000$)、グリーフケアが訪問看護師の役割であるという認識 ($p=0.000$)、予期悲嘆へのケアが訪問看護師の役割であるという認識 ($p=0.000$)、グリーフケアの必要性の認識 ($p=0.000$) であった (図1~7)。



グリーフケア研修会を実施することで、グリーフケアへの興味や理解度が増し、グリーフケアや予期悲嘆へのケア実践意欲や役割、必要性への認識が高まった。これらのことから、グリーフケア研修会は効果的であったと言える。しかしながら、これらの結果は研修会直後の認識の結果で比較しているため、今後は認識のみではなく、実際の実施にどのように変化が見られたのかをみていく必要があると考える。

対象は、25名で全員が女性であった。訪問看護経験年数の平均は 11.0 ± 6.8 、看護師経験の平均は 22.2 ± 8.3 年であった。研修会前と終了後1か月において、有意な差がみられた項目は、家族が十分に介護を行ってきたことを伝える ($p=0.001$)、悲嘆や死別に関連する手記や本、遺族会などを紹介する ($p=0.002$) であった。

グリーフケア研修会を実施することで、グリーフケアに関する看護実践の頻度が増えたことが明らかになった。これらのことから、グリーフケア研修会は効果的であったと言える。しかしながら、有意な差がみられなかった項目もあるため、今後さらに検討を行い、よりよいプログラムに修正する必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計6件)

Fumiko Okamoto, Mizuko Hiramatsu, Difficult feelings of visiting nurses regarding grief care for families providing end-of-life care for cancer patients at home, 17th EAFONS, 2014年2月20日、「Manila (Philippines)」

Fumiko Okamoto, Mizuko Hiramatsu, Difficult feelings and coping strategies of visiting nurses regarding grief care for families providing end-of-life care for cancer patients at home, 35th International Association for Human Caring Conference, 2014年5月24日、「Kyoto International Conference Center (Kyoto・Kyoto)」

Fumiko Okamoto, Mizuko Hiramatsu, Difficulty of Visiting Nurses in Delivering Grief Care for Bereaved Families who Provide End-of-Life Care for Cancer Patients at Home, 2th International Home Care Nurses Organisation Conference, 2014年9月24日、「Singapore (Republic of Singapore)」

平松瑞子・岡本双美子、在宅終末期がん患者を看取る家族へのグリーフケアに関する訪問看護師の困難～死別前の家族への支援を通して～、第38回日本死の臨床研究会 年次大会、2014年11月1日、「別府国際コンベンションセンター(大分・別府)」

Fumiko Okamoto, Mizuko Hitramatsu, Effect of an Education Program for Home-care Nurses Regarding Grief Care for Families Providing End-of-Life to Cancer Patients, 19th EAFONS, 2016年3月14日、「Makuhari Messe (Chiba・Chiba)」

Fumiko Okamoto, Mizuko Hitramatsu, Changes in Nursing Practice after an Education Program for Home Care Nurses Regarding Grief Care for Families Providing End-of-Life Support to Cancer Patients, 14th Annual Asian American/Pacific Islander Nurses Association Conference, 2017年3月25日、「Hawaii (USA)」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 双美子 (OKAMOTO, Fumiko)
大阪府立大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号：40342232

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

平松 瑞子 (HIRAMATSU, Mizuko)
市立吹田市民病院・地域看護専門看護師